

第70回記念埼玉県美術展覧会 審査評

【第6部 写真】

○総評

審査主任 わたなべ ひでお 渡辺 英夫

2年越しの、待ちに待った第70回県展が開催されることになりました。この約2年という空白が作家活動に及ぼした影響か、審査対象出品数は1,001点に留まり、約300点の減にはなりましたが、その内容は豊富で、写真が持つ多様性と作者の熱意を改めて感じられました。

審査は9名で行い、投票とコメントを交えて行い入選469点を決定しましたが、紙一重で惜しくも選外になった作品も多く、大いに審査員を悩ませたことも報告させていただきます。

今や写真は誰もが参加できる世界になりましたが、それゆえ“写った”ことに満足してその先を求めないことも否定出来ません。是非、自身が主体となった“写す”作品を目指して頂きたいと思います。今回受賞された作品を見ると、レンズを向ける作者姿勢が主役となり、更に目の前の世界と自分との語り合いを厳しく見つめた結果と言えるでしょう。次回も、それを目にする事で、私たちの心まで響く多くの作品を期待しております。

○埼玉県知事賞

きぼう の たかぎ ともひこ
「希望を乗せて」 高木 朝彦

漆黒の世界の彼方から、灰明るい光がこちらに向かってきます。線路と思しき輝きから、どうやら電車が近づいて来たようです。しかし、それは不確かで現実感は見られません。

過去の写真的価値観からすれば疑問だらけのこの作品が私たちの心を射抜くのは、作者の純度の高い感性からではないでしょうか。現実感を除くことで、見る者それぞれの想像に委ねる作画が秀逸です。そう、希望という名の電車の到着が間近いことを予兆します。

○埼玉県議会議長賞

こうふく しょうぞう かとう しゅう
「幸福の肖像」 加藤 秀

このデジタル時代でありながら、一見、無策な作品と思わせますが、それ故に、“撮る・撮られる”の関係に人の温もりの柔らかさを感じさせます。3点の配置を見れば、男女の信ずるマリア像が中央でそっと見守っているようで、作者の人となりがあるからこそ、この作品が出来たことは明白です。つまり、写された対象を見れば作者の存在も同時に写ることの良き証明と言えます。技術を見せず、感じさせる方法の選択が高度と言えます。

○埼玉県教育委員会教育長賞

にじ こみち いりえ かずお
「虹の小径」 入江 一男

雨の日の朝、通学路を高い位置から撮影して、ごくまれにしか訪れない条件を見事なフレーミングで撮り止めています。色とりどりの子供達の傘の列がまるで虹のようで、まさにレインボーの小径で、先頭のランドセルが通学路を物語っています。また、車の赤と最後の列の赤い傘が効果的な条件になっていますが、常日頃の作者の観察眼が実を結んだ結果と言えます。良い被写体は、いつもすぐ身近にあることを教えてくれました。

○第70回記念賞

けはい たていし れい
「気配」 立石 怜

見慣れた自宅周辺で夕暮れ時を狙った作品で、空き地や洋風の建物が街灯に照らされた異様な光の中、人影もないのに不気味な気配を感じたのだと思います。特に、穴の開いたタイル壁面が全体を引き締めています。いままでとは違い、コロナ禍で何処へも出られず、作者が敢えて自宅周辺を題材に「気配」を感じ取ったのは素晴らしい発想です。仕上げもイメージに合わせ、薄暗いなかにも光を感じさせる技術は他の作品を圧倒する勢いでした。

○埼玉県美術家協会賞

ぎょうしすぎもと じゅんこ
「凝視」 杉本 純子

猫から発せられる強い視線とホッコリと窪みに体を埋め、満足げに横たわる姿に「元気かい？」と思わず声を掛けたくくなりました。猫本来の習性の一面と共に、深い明暗ある画調が、一層主役を更に引き立てて効果を増しています。プリントもやや暗めに仕上げ、目の輝きを強調したことで、出合った瞬間の緊張感を盛り上げています。作品内容に沿った仕上げをすることが必要なことを明確に示してくれたといえるでしょう。

○埼玉県美術家協会賞

しゅんこうりゅうれい くぼ ゆきこ
「春光流麗」 久保 幸子

一枚の写真を4分割して、襖絵に見立てたことが先ず目を引きました。また、その必要性も、穏やかな積雪に沿った木立の流れる影によって納得です。安易な4分割では成立しない筈です。また、この作品を高度な作品に引き上げた要素は画面構成の評価だけではなく、目には見えない早春の息吹を感じさせるところにありました。写真は目視するものですが、一方、それぞれの人が自らの心で自由に世界を作り出せる楽しさもある好例と思います。

○埼玉県美術家協会賞

あお ひまわり かわさき まさたか
「青き向日葵」 川崎 将隆

光と影を表現する白と黒のモノクロームの世界から生まれた写真が、今、ブルーを基調とするモノトーンの色彩の中に限りなく美しいヒマワリとなって再現されました。ゴッホの影のない太陽の化身のようなヒマワリと異なり、影のなかに現代の深い憂愁を感じ、それでも光に向かって花開こうとするヒマワリに力強い明日への希望を感じます。現代は、ともすれば派手な色彩が美しいという評価がありますが、是非、内容に沿ったカラーを見出して欲しいものです。

○埼玉県美術家協会賞

ついで みやざき まさよ
「追慕」 宮崎 雅代

古くからある日本の行事を、丁寧なモノクロ写真で再現しています。実に客観的な視点で作成され、見る人の期待を裏切らないことも評価の一つで、僧侶の数珠・遺影・提灯・線香の煙など、目を閉じて思い馳せればすべてが蘇ってくる映像ですが、それを主観的ではなく捉えたことが、この場合は成功しました。ここでも写真における不思議が写っています。すべてに静かさが漂っていることも、これも日本の歴史ある美学と感じました。

○さいたま市教育委員会教育長賞

ゆう くるかわ りつこ
「遊」 黒川 律子

子供たちが遊具で遊んでいるこの情景はよくこのアングルで撮られていますが、着いた手が目にも見え、お尻が鼻にも見えるなど想像が膨らみます。また、セピア調にしたのも効果的で、生地の色に注意がそがれることなく奇妙な光景を浮き彫りにしています。子供時代の、多感で、不安定で、やさしくて、残酷さも持ち合わせる子供の世界を、作者の特異な視点によって、既成概念ではえられない新たな子供の世界として浮きあがりました。

○テレビ埼玉賞

ふんまん さかもと のりこ
「憤懣」 坂本 典子

何時も人間の作った尺度で物事を見て判断している私たちですが、この作品を目にしたときの驚きと恐怖心を抱く人は、きっと素直な人間性を備えた人と思います。写真が持つ質感や尖鋭度、また、固定された瞬間の把握がこの事実を目の中を通り越し心に焼き付けます。写真の持つ魅力は様々ですが、最も魅力的な部分を見せてくれました。体毛の一本一本や、意外とやさしそうな眼差し、また、一本欠けてしまった歯など十分ご堪能ください。

○東京新聞賞

さいしゅうでんしゃ あおしか よういち
「最終電車」 青鹿 洋一

寒い雪の夜ですが、待合室のぬぐるみや、駅舎、ホーム、電車のヘッドライトの光が温もりのある灯りに見えて安堵感を覚えます。「最終電車」という画題は雪中の足跡がそれを物語っています。この作品は古典的な手法で、極めてシンプルな構成でありながら大変奥深い作品で、画面の向こうに確かなストーリーの存在を実感できるのは作者能力の賜物です。また、起承転結の分かりやすさを兼ね備えた、湿度の高い日本の情景と言えるでしょう。

○埼玉新聞社賞

きせき のなか ゆい
「木跡」 野中 結衣

家を覆うように張り付いて伸びた木を、コラージュで組み合わせることによって、一枚で見せるより長く伸びている様子が強調されています。黒を利用するとさらによかったと思いますが、気になったものをオリジナリティーある作品に仕上げたところを評価しました。タイトルの「木跡」はまさに奇跡と思えた光景だったからかと想像します。作者は高校生とのこと。素直な思いをこれからも創作活動につなげて欲しいと思いました。

○埼玉県美術家協会会長賞

はくちゅうむ なかじま さちこ
「白昼夢」 中嶋 幸子

淡い色調が人の心のある部分を物語り、現実では目に出来ない光景を、作者能力によって、新たな世界として再現させてくれました。まさに白昼夢の世界です。レンズを向けた対象も定まらず、霧の中を浮遊しているようでもあります。写真を“対象表現”と“自己表現”に大きく分けた場合、明らかに後者に当たる作品で、そこに作者感性が加わったとき、その作品を目にした鑑賞者も作者の導きによって、素直にその世界に入れることでしょう。

○高田誠記念賞

うみ な こばやし しんいち
「海鳴り」 小林 伸一

大変魅力的な被写体に、更に写真の持つ力を存分に取り入れ、また、作者の撮影技術も加わり、ダイナミックな作品に仕上げました。赤い鳥居と岩礁の配置や、打ち砕かれた波しぶきと暗い空など、全て作者のすぐれた能力と経験によって選択されたものと思います。その結果、この作品を目にした鑑賞者はおそらく怒涛の響きを感じることにと思いますが、その目には見えない、感じさせることの重要さを示してくれた優れた作品です。